

紡績機

有形文化財（工芸品）

昭和31年9月27日指定

所在地：尚古集成館

所有者：カクイ株式会社



この機械は、慶応3(1867)年に操業を開始したわが国最初の近代的紡績工場「鹿児島紡績所」で使用するため、イギリスから購入したものである。

付属するローラー磨針機に「PLATT BRO. RS & CO.OLDHAM. 1866」という銘が残っており、貴重な文化財である。

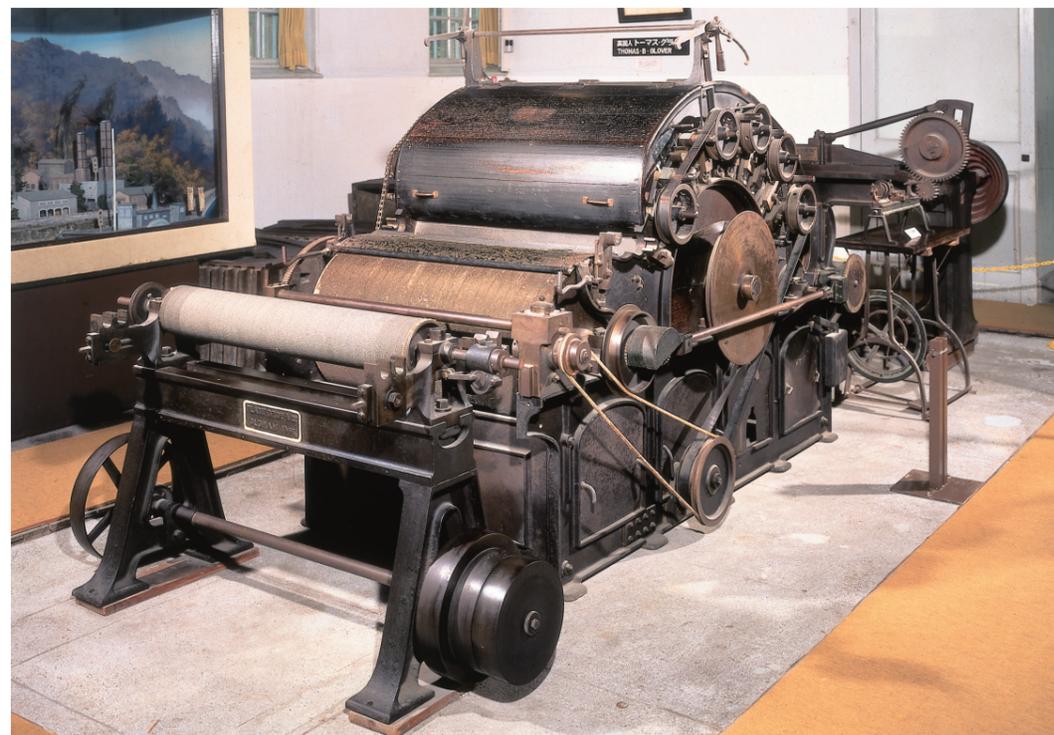
薩英戦争後の慶応元(1865)年に29代島津忠義の命で留学生とともにイギリスへ渡った使節団長の新納久脩、五代友厚らはマンチェスターのプラット会社に紡績機械を注文し、

鹿児島における紡績事業の育成を企てた。

さらに、薩摩藩はイギリス人技師7名を招き、磯に石造鉄柱平屋建の洋式工場をつくり、これらの機械を収めて、慶応3(1867)年5月に鹿児島紡績所を操業させた。

創設時の打綿機1台、梳綿機3台がカクイ株式会社にひきつがれ昭和42(1967)年まで使われていた。

その後、梳綿機1台が尚古集成館で保管・展示されている。



紡績機

(写真提供：尚古集成館)

刀銘 薩州住藤原正房 一口

有形文化財（工芸品）

昭和31年9月27日指定

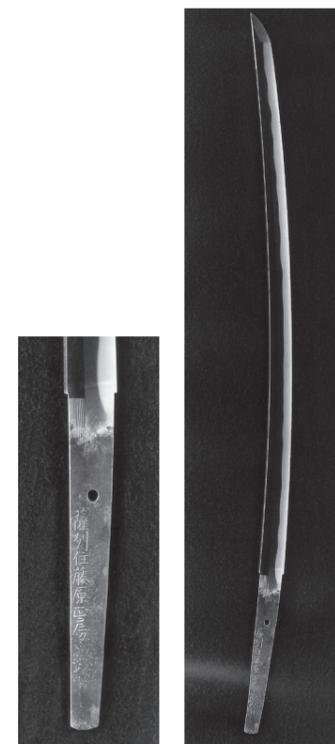
所在地：鹿児島県歴史資料センター黎明館

所有者：鹿児島県

作者の藤原正房は、はじめ氏房と称し、丸田備後守氏房の次男で、後に伊豆守の官位を受領した。藩主の命で相州伝の鍛法を学び、同名の人が数代続き、その門流から名工正清、正幸等を輩出した。

本刀は、地刃健全で、同工の作風を代表する傑作品である。

刀の長さ69.7cm、反り1.8cm、地鉄、小空目。刃文は互の目乱れ足よく入り、小沸ついて勾深し。茎は生ぶで、目釘孔は1個、銘を「薩州住藤原正房」と刻む。



薩州住藤原正房

(写真提供：鹿児島県歴史資料センター黎明館)

刀銘 主馬首一平安代 一口

有形文化財（工芸品）

昭和31年9月27日指定

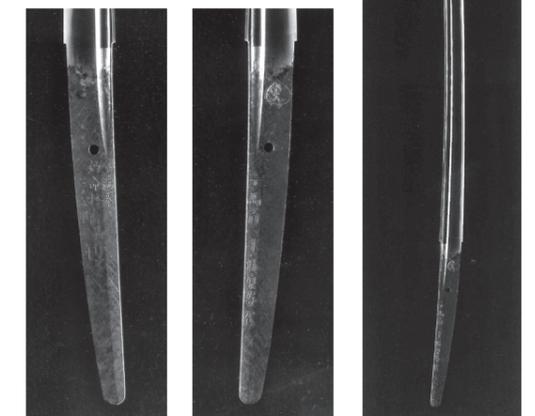
所在地：鹿児島県歴史資料センター黎明館

所有者：鹿児島県

主馬首一平安代は、山城守安貞の長男で、はじめ鍛刀の技を父に学んだが、後に波平安国とも師弟の約を結んだという。享保6(1721)年、幕命によって江戸に行き、江戸浜御殿において鍛刀し、茎に一葉葵文を切ることを許され、江戸からの帰途京都において主馬首に任ぜられ、名声が天下に広まった。

刀は、地刃健全、かつ同工の代表作である。刀の長さ72.7cm、反り1.8cm、小板目に柁まじり、刃文は直刃浅くのたれて、互の目まじり足入り、沸勾深く、ところどころ荒沸ついて、裏物打ちあたり、湯走りごころに飛入る。茎は生ぶで、鑢目は楡垣となっている。

目釘孔は1個、刀表に銘を「主馬首一平安代」と刻む。



主馬首一平安代

(写真提供：鹿児島県歴史資料センター黎明館)

かたな めい おく やまどの かみ たいらの あそん もとひら
刀 銘 奥大和守平朝臣元平

有形文化財（工芸品）

昭和 53 年 3 月 8 日指定

所在地：鹿児島県歴史資料センター黎明館

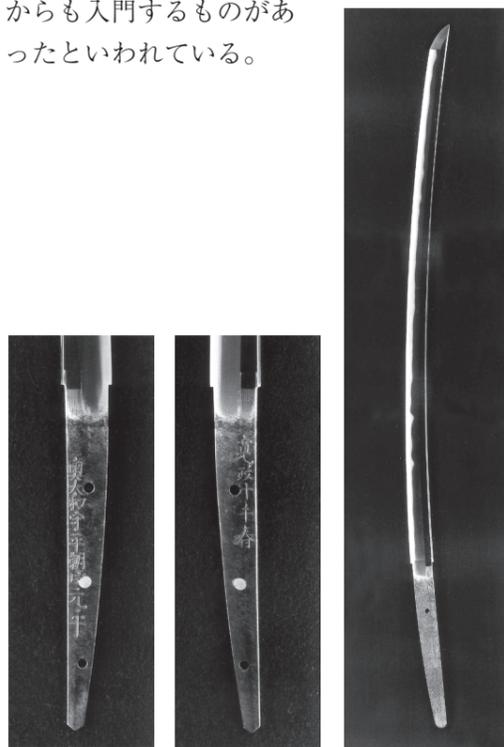
所有者：鹿児島県

作者の奥元平は、始祖奥忠清の玄孫で、延享元(1744)年の生まれ、大和守を受領して、当時江戸の水心子正秀と並び称された名工である。

元平の作品中この刀は傑出の作である。

刀の長さ 69.3cm である。元平の打つ刀は、一般に身幅が広く、堂々とした姿のものが多く、刃文は互の目乱れを得意としているが、この刀のように直刃調のものは割合に少ない。

元来は、薩摩新々刀期を代表する刀工の 1 人で、遠く会津や尾張等からも入門するものがあったといわれている。



奥大和守平朝臣元平

(写真提供：鹿児島県歴史資料センター黎明館)

かたな めい ひとつ ば あおいもん
刀 銘 (一葉葵紋)
 しゅ めの かみ いっ べい ふじ わら やす よ
主馬首一平藤原安代

有形文化財（工芸品）

昭和 58 年 4 月 13 日指定

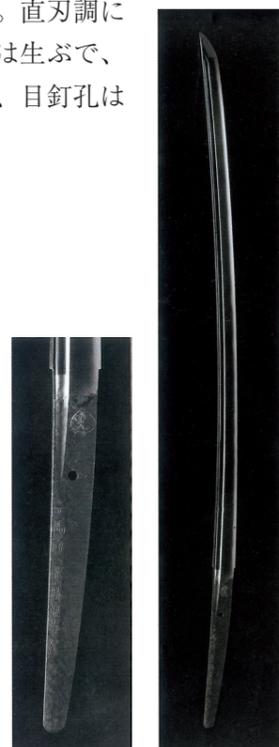
所在地：鹿児島県歴史資料センター黎明館

所有者：鹿児島県

作者の主馬首一平安代は、薩州刀工山城守安貞の長男で、玉置小市ともいい、波平安国とも師弟の約を結んだという。享保 6 (1721) 年、将軍吉宗に招かれ、江戸浜御殿において鍛刀し、茎に一葉葵紋を切ることを許され、主馬首に任ぜられた。

この刀は、享保 9 (1724) 年に正清とともに再度の命により鹿児島で鍛え、翌年幕府に献上されたものである。地味な出来であるが、地刃の出来がよい。

刀の長さ 76.1cm、反り 1.5cm、身幅広く、反り浅い。板目肌流れ、地沸よくつく。直刃調に浅く湾れ、茎は生ぶで、鑢目は桧垣で、目釘孔は 1 個である。



主馬首一平安代

(写真提供：鹿児島県歴史資料センター黎明館)

かたな めい ひとつ ば あおいもん
刀 銘 (一葉葵紋)
 もんどの しょう ふじ わら まさ きよ
主水正藤原正清

有形文化財（工芸品）

昭和 58 年 4 月 13 日指定

所在地：鹿児島県歴史資料センター黎明館

所有者：鹿児島県

作者の主水正藤原正清は、薩州刀工惣左衛門正房の弟子である。享保 6 (1721) 年に江戸に招かれ、徳川吉宗のために鍛刀し、一葉葵紋を許されて、帰途主水正に任ぜられた。

この刀は、享保 9 (1724) 年に一平安代とともに再度の命で鹿児島で鍛刀し、翌年に幕府に献上され、永く徳川家に伝来していたものである。

刀の長さ 76.7cm、反り 1.2cm。小板目肌つみ、地沸やや荒目につく。小湾れに互の目。茎は生ぶで、鑢目勝手下りで、目釘孔は 1 個である。



主水正藤原正清

(写真提供：鹿児島県歴史資料センター黎明館)

ちゃ き ひらの かた つき ひと ぐち
茶器 平野肩衝 一口
 つけたり もく ろくならびに ふ ぞく ひん
附 目録並附属品

有形文化財（工芸品）

昭和 55 年 3 月 31 日指定

所在地：尚古集成館

所有者：株式会社 島津興業

平野肩衝と呼ばれるこの茶入は、漢作唐物で、口径 4.1cm、胴径 7.95cm、底径 4.7cm、高さ 8.68cm で、黒釉色中に赤みを含む茶色釉の斑点があり、「大名物」とされている。

この茶入は、河内国平野郷の町人平野道是が所持していたのでこの名がある。その後豊臣秀吉の所有となり、さらに文禄 4 (1595) 年に文禄の役の恩賞として 17 代島津義弘に贈られたものである。その後、寛永 7 (1630) 年将軍家光が 18 代家久の邸に臨んだとき、この茶入をもって供応した。

享保 16 (1731) 年の桜田藩邸の火災の際、破損したが、漆を使って修復された。

象牙製の蓋一枚、白羽二重の御物袋・鈍子の袋・黒塗挽家などが付随する。



平野肩衝

(写真提供：株式会社島津興業)

さつ ま がらす しまづ け でん らい
薩摩硝子 島津家伝来

有形文化財（工芸品）

平成 17 年 4 月 19 日指定

所在地：尚古集成館

所有者：株式会社 島津興業

薩摩切子は、透明ガラスの外側に紅、藍、紫、緑などの色ガラスを厚く被せ、色ガラス部分をカットして文様を浮かび上がらせたものである。

薩摩切子の他、板ガラス・半球体ガラス等を加えた 22 組(54 点)の薩摩硝子で、江戸時代から明治初期にかけて製作されたものである。薩摩切子は、厚くさせた色ガラスを緩やかな角度でカットし、次第に色彩を薄め透明ガラスとの境をあいまいにする「ぼかし」が美しい。

薩摩藩のガラス製造技術水準の高さを示すまとまった資料として、本県工芸史上貴重なものである。



薩摩切子
(写真提供：尚古集成館)

あおい ぼ たん もん しつ ほうつなぎ まき え
葵牡丹紋七宝繫蒔絵
雛道具

有形文化財（工芸品）

平成 20 年 4 月 22 日指定

所在地：尚古集成館

所有者：株式会社 島津興業

雛道具は、享保 14 (1729) 年、5 代将軍綱吉の養女竹姫が 22 代島津継豊に輿入れした際に、竹姫が婚礼調度とともに持参したものと伝えられ、99 種類 407 点からなる。

その多くは七宝繫の文様と徳川家の家紋三つ葉葵紋と島津家の家紋牡丹紋を蒔絵で描いたもので、金具類は総銀製である。

塗、蒔絵ともに仕上がりは精巧かつ重厚な趣をもっており、漆工芸品としての価値も高く、江戸時代の大名家の暮らしぶりをうかがい知ることができる。



葵牡丹紋七宝繫蒔絵雛道具
(写真提供：尚古集成館)

はく ゆう ちゃ わん ひ はかり て
白釉茶碗火計手

有形文化財（工芸品）

平成 23 年 4 月 19 日指定

所在地：鹿児島市立美術館

所有者：鹿児島市

白釉茶碗火計手は、17 世紀に堅野系の窯で焼かれたもので（製作者不明）、火計手ともいわれ白薩摩焼の初期のものと考えられる。

火計手は、渡来した朝鮮陶工が、朝鮮から持ってきた材料（白土や釉薬）を用いて制作、焼成の「火」だけ、火ばかりが日本という意味から付けられた手法である。一般的に、

薩摩焼の初期の作品であると言われている。

この茶碗は、てらいのないロクロ形成に、透明な釉を掛けています。微妙に青味がかかっているところをみると、還元焼成（窯で焼く際に、酸素を制御した焼き方）がかった焼成かと思われる。戦火に遭い、破損、修復した部分もあるが、素材で白薩摩焼の原点をみるような茶碗である。



白釉茶碗火計手

(写真提供：鹿児島市立美術館)

くろ だ かつ ゆう ちゃ わん
黒蛇蝎釉茶碗

有形文化財（工芸品）

平成 23 年 4 月 19 日指定

所在地：鹿児島県歴史資料センター黎明館

所有者：鹿児島県

この茶碗は、17 世紀後半（制作年不明）、西餅田系の元立院窯で焼かれたものである（製作者不明）。

蛇蝎釉とは文字通り蛇や蝎の肌を思わせる形状になっている釉薬のことで、伸縮率の異なる釉薬を三重に掛けることで縮み具合の差異が生まれ、ひび割れや凹凸のついた形状となる焼き方である。この技法は、独特な効果を生む反面、偶然性に負うところが多く、部分的に亀裂が大きく入って釉の一部が流れたり、剥がれ落ちたりする欠点も多く、難しい手法である。

この茶碗は、口づくりなど形も良く、部分的な亀裂の変化が景色となり、おもしろい雰囲気醸し出している。



黒蛇蝎釉茶碗

(写真提供：鹿児島県歴史資料センター黎明館)

しろ だ かつ ゆう ちゃ わん
白蛇蝎釉茶碗

有形文化財（工芸品）

平成 23 年 4 月 19 日指定

所在地：鹿児島県歴史資料センター黎明館

所有者：鹿児島県

この茶碗は、17 世紀後半（制作年不明）、西餅田系の元立院窯で焼かれたものである（製作者不明）。

この白蛇蝎釉茶碗は、蛇蝎手といわれる手法で黒蛇蝎と対比したものである。施釉時、先に黒釉を掛け、その上から収縮の大きい白釉を被せ、焼成によってできる釉の縮みによる亀裂の効果をねらったものである。この白蛇蝎も、黒蛇蝎と同じく難しい手法である。

この茶碗は、中（見込み）外とも縮れ（亀裂）の大きさがほどよく均一に出ており、部分的な流れや剥落もなく、蛇蝎の特色が十分に発揮されている。さらに、口辺の白釉が溶けて下の黒釉の線が形を引き立たせており、良い作品である。



白蛇蝎釉茶碗

(写真提供：鹿児島県歴史資料センター黎明館)

しまづ たかひさ しょう しゅう しぐれ
島津貴久所用時雨の旗一旒ほか十六旒
 はた いちりゅう じゅうろくりゅう

有形文化財（歴史資料）

昭和 62 年 3 月 16 日指定

所在地：尚古集成館

所有者：株式会社 島津興業

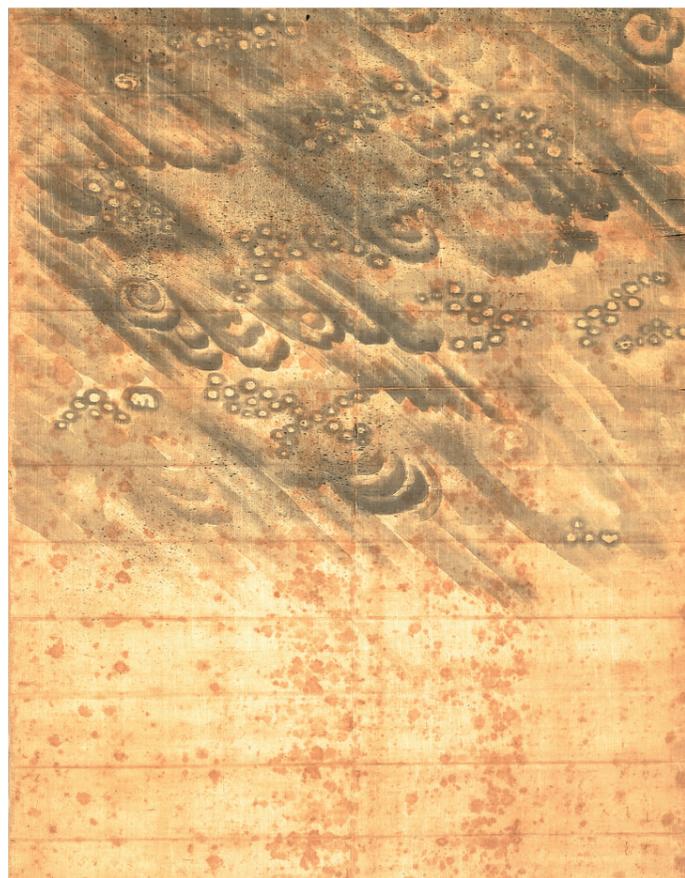
時雨の旗は、雨を主題として描いた旗としては、日本でも古い部類に属するものといわれ、これらの旗は戦国時代のものを含む島津家伝来の軍旗で、素材は絹地仕立てであり、中には清朝期の布地を使用しているものも含まれていることから、絵画史上及び工芸史上からも、貴重な資料である。

初代島津忠久が、源頼朝の庶子であるとする島津家では、頼朝から拝領したといわれる

八幡大菩薩旗、15代貴久が製作した源氏の白旗、島津家では雨を吉兆とし「島津雨」にちなんだ時雨の旗が宝物として代々受け継がれるとともに、16代義久、21代吉貴、22代継豊の時代には、その複製品も製作された。

これらの旗は、補修を加えながら代々大切に取り扱われてきたため、系統的にまとまって伝えられており、その文化的価値が高い。

なお、貴久所用時雨の旗1旒、白旗1旒、伝文覚上人筆八幡大菩薩旗1旒、島津義久所用白旗1旒、源朝臣継豊銘の旗1旒は、横切れや横折れが見られ、残存状況はあまりよくない。



島津貴久所用時雨の旗一旒（写真提供：尚古集成館）

えい かん にゅう こう せん そう ず
英艦入港戦争図
 さつ えい せん そう え まき
（薩英戦争絵巻）

有形文化財（歴史資料）

平成 9 年 4 月 21 日指定

所在地：尚古集成館

所有者：株式会社 島津興業

文久3(1863)年の鹿児島(錦江)湾における英国艦隊と薩摩藩との戦闘を描いた絵巻である。

当時の状況をおおむね正確に描いている歴史的に貴重な資料であり、絵画資料としても価値が高い。

作者は、薩摩藩の御用絵師 柳田 竜雪 (1833~1882) と伝えられている。

絵巻は2巻からなり、縦が66cm、横は第1巻が13.8m、第2巻は11.5mである。文久2(1862)年の横浜近郊の生麦村で起こった「生麦事件」の発生に伴い、薩摩藩がイギリス側の下手人処罰と賠償金支払要求を拒否

したために起こったいわゆる「薩英戦争」の様子を描いた絵巻物である。

文久3(1863)年7月2日から3日にかけて、鹿児島(錦江)湾における英国艦隊と薩摩藩との戦闘を描いたものであり、英国艦隊の鹿児島(錦江)湾侵入から、戦闘、引き上げまでを11の場面に分けて描いている。

2巻の絵巻は、紙本着色である。島津家の伝承によれば、戦争直後から明治初期にかけて制作されたと考えられている。

この絵巻には、対象が細かく克明に描かれていて、狩野派の作者の特徴が画面の中によく表れている。



英艦入港戦争図（写真提供：尚古集成館）

き し き り ょ う り か ん け い も ん じ ょ
規式・料理関係文書

有形文化財（古文書）

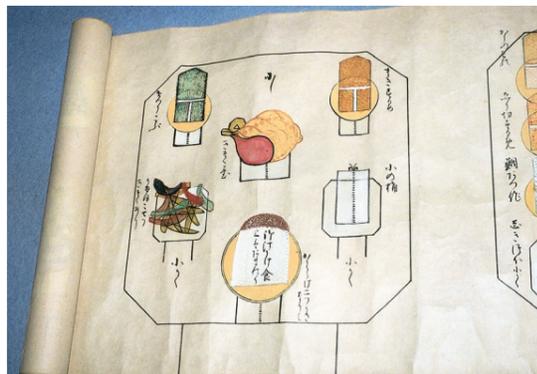
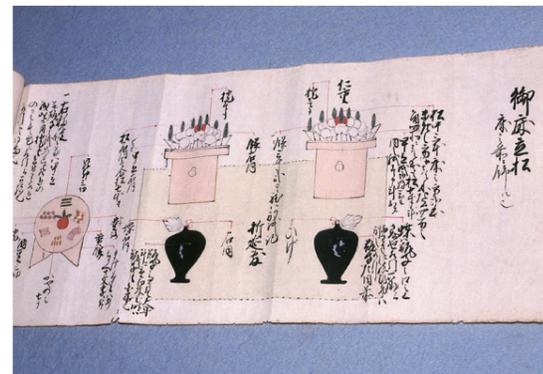
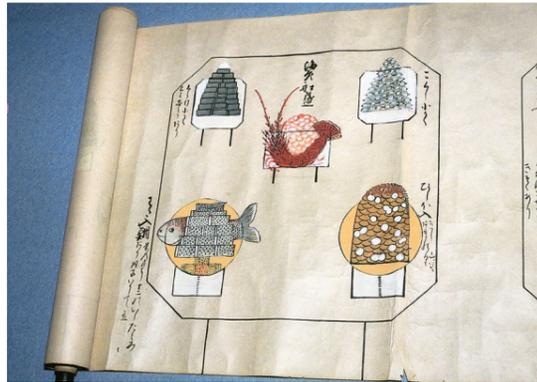
平成 18 年 4 月 21 日指定

所在地：尚古集成館

所有者：株式会社 島津興業

島津家に鎌倉時代から伝わる鎌倉流規式故実書及び江戸時代島津家の御膳所に勤めた石原家伝来の大草流規式故実書の 162 点の文書があり、将軍や諸大名、琉球王府の使者等の饗応、島津家の元服・婚礼・葬儀等の作法が記されている。

これらは、鹿児島島の武家文化及び琉球の影響を受けた鹿児島独自の風俗・文化を知る上でも貴重な資料である。



規式・料理関係文書（写真提供：尚古集成館）

と う ご う け こ も ん じ ょ
東郷家古文書

有形文化財（書跡）

昭和 34 年 10 月 23 日指定

所在地：鹿児島市東千石町

所有者：（財）示現流東郷財団

この古文書群は、島津家^{ぶとうしはん}武道師範、東郷重^{とうごうちゅう}位^{うい}によって確立された薩摩藩独特の剣法示現^{じげん}流^{りゅう}に関する史料で、約 180 点の直伝書、聞書などが含まれている。

近世初頭の当主東郷重位は、待捨流の極意に達していたが、藩主に従って上洛したおり、天正 15 (1587) 年に天寧寺 4 世住僧善吉和尚から天真正示顕流を会得し、これに待捨流の神髓とを総合混和して、独特の剣法を創始した。

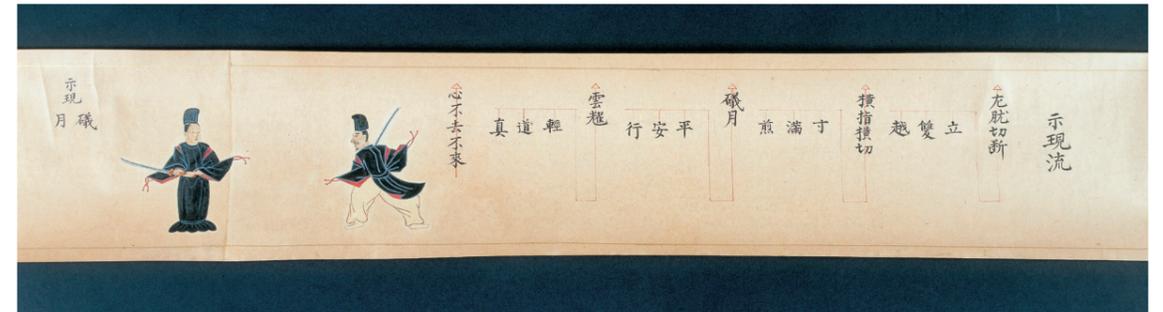
慶長 9 (1604) 年 18 代島津家久^{いえひさ}の前で秘技



を披露してその信任を得、家久の兵法指南役となり、示現流剣法を確立した。

相伝されている文書の中には、『示現流燕^{えん}飛^ひ之次第』、『示現流問答』、『示現流聞書』等の奥義書の外、明暦 3 (1657) 年の『日州諸外城引并例竿日帳』や東郷重位自筆の『古今集』も含まれているため、近世初期の藩政を知る上でも、大変貴重な資料である。

現在は、示現流史料館に展示、収蔵されている。



東郷家古文書
 （写真提供：（財）示現流東郷財団）

けい てん あい じん いっ ぶく
敬天愛人 一幅

有形文化財（書跡）

昭和 42 年 3 月 31 日指定

所在地：西郷南洲顕彰館

所有者：南洲神社



西郷隆盛は、「敬天愛人」を好んで書き、現存するものも多いが、この書は南洲神社に伝わっているものである。

この書は明治 8 (1875) 年に私学校生らの求めに応じて書かれたもので、その後、長く四方学舎の道場に掲げられていたものである。

文字は規格雄大で、小節にこだわらず、広大無辺の感があり、行書・草書を混在させて字面の多少からくるアンバランスを巧みに調整し、その筆致は豪快にして謹厳、一点一画に満心の気魄がみなぎっていて、見るものをして、心の躍動を覚えさせる。

印は、明治 5 (1872) 年以來使用してきたものであるが、この場合は恐らく後印(後世に押印されたもの)であろうという。

料紙は白唐紙または桑本紙で、縦が 60cm、横が 120cm ある。濃紺布地表装の軸仕立てになっているが、もとは額装であったらしい。体裁の大きさは、縦・横とも 135cm である。

戦後になって、四方学舎が南洲神社に移った際に、同神社に入ったものである。その後、鹿児島市立美術館に展示されていたが、美術館の改装に伴って、西郷南洲顕彰館に展示されることとなった。



敬天愛人
(写真提供：西郷南洲顕彰館)

い せい せい めい いっ ぶく
為政清明 一幅

有形文化財（書跡）

昭和 42 年 3 月 31 日指定

所在地：鹿児島市立美術館

所有者：鹿児島市



この「為政清明」の書は、明治新政府の国政に参議兼内務卿の要職にあつて参与し、その基礎を築いた大久保利通(甲東)が書いたものである。

書の体裁は、縦が 49cm、横が 165cm のもので、金箔張りが紙装、額仕立てが黒漆椽、作品の寸法は、縦が 31.8cm、横が 132cm の大きさである。

この書は、端正で気品のある書で、大久保利通の性格がよく表れている。すなわち、円転滑脱の中に、気品の高さを蔵し、気骨稜々たる峻烈さと鋭敏なる筆致をもって、才気煥発する英気を發揮して、見るものをして襟を正させるものがある。

なお、この書は明治 11 (1878) 年 5 月 14 日の朝、甲東が暗殺される直前に福島県令今吉盛典に書いて与えたものといわれる。

「為政清明」とは、国政に参画する者の、当時の信条を如実に表現したものである。政治に参与するものは、自ら心も態度も清く明るくしなければならないという意味である。

明治天皇は彼の功に対し、青山の墓地に神道碑を建てさせた。その一部には「沈着にして剛毅、不屈の精神に富み、英明善断、外に殊勲を建て、内に偉功を奏し」また「容貌端重、厳として犯すべからず、而して、人に接するに、至誠を以ってし、外剛にして内和」とある。

大久保利通は、不幸にして 49 歳の若さで凶刃に倒れた。国政に忙殺されて書に親しむ機会はそう多くはなかったであろうが、書ものにしていたことは、この作品からもうかがえる。



為政清明
(写真提供：鹿児島市立美術館)